

マリー・ド・フランスの『レ』における
amur、amistié、druerie

川口 陽子

古フランス語には現代フランス語で« **amour** », 日本語で「愛」と訳し得る語が複数見られ、マリー・ド・フランスの『レ』⁽¹⁾においては **amur**、**amistié**、**druerie** の3語が用いられている。では、『レ』においてこれらの語は各々どのような意味範囲を持ち、どのように使い分けられているのだろうか。この問いに対する一つの解釈を示すこと、それが本稿の目標である。そのために我々はまず、リシュネル版『レ』をテキストとして、その中の **amur** (89例)、**amistié** (2例)、**druerie** (16例) の使用例を、それらが表す感情を持った者を「主体」、その対象となった者を「対象」、両者が互いにこれらの感情を持つ場合を「相互的」として分類し⁽²⁾、その結果を踏まえた上で、**amur**、**amistié**、**druerie** 各々について、辞書や先行研究における語彙定義を確認し、現代フランス語訳での訳語選択も参考にしつつ、『レ』における意味範囲について検討する。その際、**amur** と **amer** の考察結果⁽³⁾の比較を行ったり、同一作品内における **amur** と **amistié** または **druerie** との使い分けについても考える。そして、『レ』における「愛」に関する考察を深めていきたい。

1. **amur**⁽⁴⁾

A-J・グレマスの『古フランス語辞典』(1994)において **amur** は、「1)神への愛 **amour de Dieu**、母、子等の愛 **amour maternel, filial, etc.**、2)異性者間の愛 **amour entre les sexes différents**、3)忠誠心 **sentiment de fidélité**、4)恋人 **objet de l'amour**、愛しい人 **personne aimée**」と定義されている⁽⁵⁾。またJ・フロリ(1992)は、12世紀の **amur** は「制度的繫

かりが時には付け加わることがあるとはいえ、それとは無関係に、二人の人物を結び付ける愛情 affection を強調して」おり、「一人の男性と一人の女性との間の感情的愛着 attachement affectif を表す」、だが「二人の女性あるいは二人の男性の間の友好的な深い愛着を意味することもまた非常にあり得る、とはいえ、あいまいなニュアンスを帯びることも、ほんの少しの同性愛的側面を想起させることもない」と指摘し、それは人間関係における「感情的 affectif、心的 psychique」⁽⁶⁾側面を暗示していると述べている。

『レ』における amur に関しては、D・マクレランド(1977)がリシュネル版における 89 例を「1)愛 amour [80 例]、2)友愛 amitié [8 例]、3)宗教 religion [1 例]」に分類している⁽⁷⁾。また大高順雄(1994)では、大高版における 89 例を「A)愛情 affection、愛 amour (官能的な意味で sens sexuel) [76 例]、B)擬人化された愛 amour personnifié [5 例]、C)愛情 affection、友愛 amitié (官能的でない意味で) [6 例]、D)信仰 culte (宗教的意味で sens religieux) [2 例]」に分類している⁽⁸⁾。

『レ』において最も使用例数が多いのは、恋人達の愛 (48 例) に代表される、男女間の官能的愛 (79 例) である。この amur は、ジョナン訳ではほとんどの場合 amour (愛)、aimer (愛する)、amoureux (愛の) を用いて訳出され、ジョナン訳で別の訳語が当てられている場合でも、アルフ=ランクネル訳、ミーシャ訳の少なくともどちらか一方で amour または aimer が訳語として選ばれている⁽⁹⁾。

夫婦愛を表す amur として確認されたのは 1 例 (B v.55, 妻から夫への愛) だけであるが、この例の存在の意味するところは大きい。何故ならば、この使用例は、夫婦愛を示す amer⁽¹⁰⁾とともに、政治的経済的理由によるものが多い当時の結婚は必ずしも愛の結果ではなかったとはいえ⁽¹¹⁾、それでもやはり中世の物語において「夫婦の愛は望ましく、また望まれているもの」⁽¹²⁾であることを、さらには、『レ』の語り手が夫婦間においても愛は存在すると考えていたことを示すものだからである。

恋人達とその敵対者という関係において、敵対者が主体である愛は対象によって受け入れられることのない愛として、恋人達の一方が主体である愛は対象にとって手の届かない愛として描かれている。これは amer の場合と同様の結果である⁽¹³⁾。

主体または対象の一方が不特定者である使用例は全て、ギジュマールと女性(達)に関わるものである。彼によって愛されることも(*G* v.58)、愛を求められることもない(*G* v.66)不特定の女性達の存在は、彼の命を救える、まだ見ぬ唯一の女性(*G* v.115, v.131)と対比されている。また、*G* v.551、v.648の女性達は、ギジュマールの恋人である奥方と対比されている。*G* v.447-448「あなた様には愛する *amer* ことがお出来になります、／あなた様の愛 *amur* が叶うように」に関しては、川口(1999)でも述べたように⁽¹⁴⁾、この箇所の発言者である侍女が、聞き手ギジュマールの愛する女性が自分の女主人であることに気付いているにもかかわらず、彼に反感や不信感を抱かせぬようにという配慮から、意図的に、彼の愛の対象を明確にせぬまま話を進めていると考えられる。

主体と対象がともに不特定者である使用例のうち、口説くエキタンを拒む奥方の台詞中に含まれる *Eq* v.140 のみ、「貧しいが誠実な男性」という主体に対する条件付けがなされており、その条件が王エキタンの対極にいる男性を想起させる。また *G* v.237、v.240、*Ls* v.63 では、主体は人一般(*G* v.237 : *hom*, v.240 : *chascuns* / *Ls* v.63 : *ki* [先行詞なし])として示されているが、対象は不明である。しかし、*G* の2例はローマ神話のウェヌス⁽¹⁵⁾の司る愛が、また *Ls* の例は奥方と隣人騎士との愛が問題となっている箇所であり、したがってこれら3例でも *amur* は男女の愛を表していると理解される。

男女の愛を表す *amur* の使用例の中には、主体と対象の関係からは分類不可能な例もある。リシュネル版においてそれらは頭文字が小文字か大文字か、つまり普通名詞扱いか固有名詞扱いかによって2グループに下位分類される⁽¹⁶⁾。そのうち普通名詞扱いの *amur* に関しては、ウェヌスの司る愛を表す *G* v.234 を除けば、どのようなかたちの *amur* が問題となっているかは明記されておらず、文脈から男女間の官能的愛を表すと判断した⁽¹⁷⁾。その結果、「愛というもの」を表す *amur* の使用例は、官能的愛以外の愛の場合には皆無となった。

固有名詞扱いされている *Amur* に関しては、全て主語であり、恋人達をその矢で射たり(*G* v.379)、責め苛んだり(*G* v.420, v.430)、自らの手中に収めたり(*Eq* v.54)、火

花で刺激したり(*Lv* v.118)、使者を送り、愛するように命じたり(*El* v.304)する。このように *Amur* は、大高(1994)が呼ぶようにまさに「擬人化された愛」であり、さらに言えば、恋人達の運命を左右する「愛の神」なのである。なお、このような *Amur* の使用例は、「愛というもの」を意味する *amur* の使用例と同様、官能的愛を表す場合においてしか認められない。

官能的意味合いを含まない愛を表す *amur* の場合、今は亡き 3 騎士への奥方の憐憫の情を表す *Chf* v.167 を除けば、全て同性者同士の愛を表しており⁽¹⁸⁾、ジョナン訳では *Chf* v.167 (*tendresse*)、*El* v.66 (*amicalement*)、*El* v.1027 (*amour*)以外の箇所では *amitié* と訳されている。特に、女性同士の場合には、ギルデリュエックとギリアドンのように両者に年齢差が見られ、「愛 *amitié* は母親が持つような感情を反映する」⁽¹⁹⁾という、マクレランド(1997)の指摘がある。なお、*amer* の場合には確認された親子、近親者間での愛を示す使用例は、*amur* の場合には見られない⁽²⁰⁾。

最後に、神への愛を表す使用例を挙げる事が出来る。しかし、この場合の *amur* は「神への愛に誓って *pur amur Deu*」という宣誓のための常套句中での使用であり、神への誠実な愛を表すとは言い難く、この点において *amer* とは異なっている⁽²¹⁾。

以上のことから、『レ』における *amur* の意味範囲は 1)男女間の官能的愛(夫婦愛、愛というもの、愛の神を含む)、2)同性者間の親愛の情または死者に対する憐憫の情、3)神への愛(ただし宣誓の常套句における使用のみ)と定められ、*amer* と同様に、かなり広い意味範囲を持っていると理解される。

2. *amistie*

グレマスの『古フランス語辞典』(1994)では、*amistie* は *ami* (友、恋人) の派生語として、「友愛 *amitié*、愛 *amour*」⁽²²⁾と定義されている。また、フロリ(1992)によれば、*amistie* は「共通の利益 *intérêts communs*、政治的あるいは制度的繋がり *liens politiques ou institutionnels* を持つ近い者達 *proches* から期待され得る支持」、「結びつきの諸価値 *valeurs d'alliance*」を強調する語であり、それは人間関係における「相互親和的 *conviviale*、社会的 *sociale*」⁽²³⁾側面を暗示している。

『レ』において *amitié* は 2 回、*B v.83* (夫から妻への愛)、*M v.35* (ミロンから姫の使者という同性者への愛) において使用されている。大高(1994)は *amitié* を「優しさ *tendresse*、愛情 *affection*」と定義した上で、上記の 2 例を「A)愛 *amour* (官能的な意味で)」「B)友愛 *amitié* (官能的でない意味で)」[*M v.35*]に分類している⁽²⁴⁾。同様にマクレランド(1977)も、使用箇所は明記していないが、「愛 *amour*」と「友愛 *amitié*」に分類をしている⁽²⁵⁾。

現代フランス語訳に関しては、*B v.83* では *aimer* (愛する：ジョナン訳、アルフ＝ランクネル訳) または *affection* (愛情：ミーシャ訳)、*M v.35* では *amitié* (友愛：ジョナン訳、アルフ＝ランクネル訳、ミーシャ訳) と訳出されている。

『レ』における *amitié* の 2 使用例をその文脈から比較すると、次のような共通点が浮上する。*B* において、妻は夫に「私は誰よりもあなた [=ビスクラヴレ] を愛しています。／私には何もお隠しにならないで。／私を少しもお疑いにならないで。／そうでなければ、(あなたには)愛 *amitié* がないと思われましょう」(vv.80-83) と迫る。ここで妻が言う「夫の愛」とは、妻を「愛している」という感情だけでなく、妻に秘密を打ち明けられる程の、妻に対する夫の深い「信頼の念」でさえあると考えられる。また、*M* においては、「友よ、さあ、手はずを整えて下さい、／私が私の恋人に話が出来るように、／そして、私達の秘密を隠すように。」(vv.36-38) と姫からの使者に「大いなる愛 *amitié* を約束し」(v.35)で言うミロンの台詞に、この使者に対する彼の「信頼の念」が伺われる。このようにいずれの場合においても、*amitié* には「信頼の念」が伴っているのである。

次に、各作品内における *amur* と *amitié* の意味範囲を比較する。*M* において *amur* は男女間の官能的愛と神への愛を、*amitié* は同性者間の親愛の情を表し、2 語の意味範囲には重なりは見られない。他方、*B* においては、*amur* も *amitié* も夫婦愛を表しているという点において、2 語の意味範囲に重なりが見られる⁽²⁶⁾。しかし、上で述べたように *B v.83* の *amitié* が夫の妻への愛＝信頼を表すのに対し、*B vv.54-55* 「もし私 [=夫] がそれ [=夫の秘密] をお前 [=妻] に言えば、そのことで不幸が私を見舞うことになるだろう、／というのも、私はお前を私への愛 *m'amur* から

引き離すことになるだろうから」では、*amur* が表す妻の夫への愛と信頼の念との結びつきはほのめかされている（夫の秘密を知れば、妻は夫を愛さなくなる→夫を受け入れなくなる→夫を信じなくなる）にすぎない。したがって、*B*における *amistie* と *amur* の使い分けは、それらが表す感情に「信頼の念」が含まれているかどうかを基準としていると言えるだろう。

以上のように、*amistie* は、異性者間の愛も同性者間の愛も、官能的愛もそうでない愛も、その意味範囲に含んでおり、この点において *amur* の意味範囲との重なりが認められる。だが、*amistie* は、主体から対象への信頼の念も含意するという点において、*amur* と一線を画している。

3. *druerie*

グレマスの『古フランス語辞典』（1994）において *druerie* は *dru*（恋人／豊かな）の派生語として、「1）友愛 *amistie*、愛情 *affection*、2）色事 *galanterie*、情事 *intrigue amoureuse*、3）愛の喜び *plaisir amoureux*、4）色事上の贈り物 *cadeau galant*」と定義されている⁽²⁷⁾。また、フロリ(1992)によれば、*dru* 及び *druerie* は、『レ』における使用の「ほぼ全ての場合において現代的意味における恋人達 *amants* の間の官能的関係 *relations sensuelles* と、また、その他の出現例においては愛し合う男女、たとえ『恋人』とならなかったとしても、しかしながらそうなることを熱望している男女の間に存在する関係と関わって」おり、したがって、*druerie* は人間関係における「感傷的 *sentimentale*、官能的 *sensuelle*、性的 *sexuelle*」⁽²⁸⁾側面を暗示しているのである。さらに、R・デュビユイ(1992)は、『レ』における *druerie* について「相互的愛 *entramur*」、「諸感情の必要不可欠な相互性を表現する」ものと指摘し、「真の愛」、「愛の卓越した、昇華された形態」⁽²⁹⁾と見なしている。

マクレランド(1977)では *druerie* の全 16 使用例が「愛 *amour*」の項目中に一括りにされているが⁽³⁰⁾、大高(1994)では「A）愛 *amour*、愛による絆 *liaison amoureuse*」（12 例）と「B）愛の証 *gage d'amour*、贈り物 *présent*」（3 例）に分類されている⁽³¹⁾。

現代フランス語訳に関しては、ジョナン訳において、男女間の愛という感情を表

す druerie は amour(愛: *G* v.505, *Eq* v.15, v.185, *El* v.542)、passion(情熱: *Eq* v.82, v.124)、faveurs (愛顧: *Lv* v.267, v.317)、liaison (絆: *Eq* v.132, *Lv* v.336) 等と、男女間の愛の証としての具体物を表す druerie は cadeaux d'amour (愛の贈り物: *Ch* v.57)、gage d'amour (愛の証: *Ch* v.68, *El* v.431) と訳出されている。このようなジョナン訳における druerie 解釈は、大高(1994)の解釈と一致している。

愛という感情を表す druerie の場合、恋人達の愛、恋人達の敵対者が主体である愛、対象が不特定者である愛に下位区分され得るとはいえ、男女間の官能的愛に意味範囲が限られているという点において、amur や amitié とは異なっている。

しかも、「druerie という概念に常に付随する具体的含意が、結局、恋人達の間の肉体的関係 relation charnelleを示すためのこの語の使用を正当化しているということは、全く論理的なこと」であり、druerie という語の「意味領野 champ sémantique」は「一つの感情の定義から、その成就を飾る行為の表現にまで広がっている」⁽³²⁾とデュビュイ(1992)が述べている通り、『レ』で用いられた druerie には、男女間の肉体的関係の存在を想起させる例が少なくない。例えば *G* において、奥方に対するギジュマルの言葉「私は愛に関して de druerie あなたを求めます」(v.505)に対し、結局、「(奥方は)彼にすぐに与える／彼女の愛を l'amur de li、そして彼は彼女に接吻する」(vv528-529)。このような流れから、ここでの druerie は、amur という感情と接吻という身体的行為を 1 語で表現するものであるように思われる。*G* には「(メリアデックは) 愛に関して de amur 彼女 [=奥方] を求めた」(v.834)という表現もあるが、メリアデックが奥方の愛を得ることはなく、ここでの amur が具体的な身体的行為に結びつくことはない。また *Lv* において、ランヴァルが王妃に明かしてしまった druerie (v.336)とは、デュビュイ(1992)によれば v.148「この愛 ceste amur が人に知られてしまったら」における「愛」であり、それは「ランヴァルと妖精が生きる愛」である⁽³³⁾。そして、この愛の始まりは彼女が「彼に自分の身も心も s'amur e sun cors 与える」(v.133)時であり、v.336 の druerie もまた、amur という感情を表すとともに、二人の肉体的関係も示唆していると考えられる。

このような特徴は *Lv* における druerie の他の使用例においても確認される。ラン

ヴァルによって拒絶された王妃の *druerie* (v.267)や、ランヴァルが求めてきたと王妃が王に訴えた *druerie* (v.317)が、王への裏切りとして非難されるべきものであるのは、デュビュイ(1992)の指摘するように、*druerie* が「恋人達以外の人々にとっては、それがもたらす単なる楽しみのために果たされた肉体的行為 *acte charnel*、肉体的関係 *fornication* しか示し得ない」⁽³⁴⁾からなのである。

確かに、恋人達の愛が *druerie* で表されることがあっても、彼等の間には肉体的関係がなかった(*E*)、あるいは少なくとも語られることがなかった(*DA*)作品はある。しかし、*E1 vv.575-580*「だが彼等 [=エリデュックとギリアドン] の間にはいかなる狂気もなかった、／軽はずみも賤しさも。／好意を抱き合い、語らい、／互いに素晴らしい贈り物を交換すること、／これが愛 *druerie* の全てだった、／彼等がともにいる間の愛 *amur* によっては。」で問題となっているのは、デュビュイ(1992)によれば「その標準的最終段階まで達していない一つの *druerie*」⁽³⁵⁾である。*DA* では、若者が姫を *druerie* によって求めると(v.66)、姫は若者に *druerie* を与えた(v.69)。しかし、若者は現状に甘んじることが出来ず、駆け落ちを姫に求めるが、結局、王の提示する試練を受けることとなり、二人とも命を落としてしまう。それゆえ、この若い恋人達は *druerie* を「完全には知ることは出来なかった」⁽³⁶⁾、つまり彼等の *druerie* は不完全だったと考えられる。要するに、*druerie* が肉体的関係を暗示しない場合というのは特殊な例なのである。

具体物を表す *druerie* の 3 使用例には、それが女性から男性への愛の証であるという共通点が見られる。しかもこの特徴は、感情を表す *druerie* に関しても、求めるのは男性、与えるのは女性である(*G v.505, Lv v.267, v.317, DA v.66, v.69*)ことを鑑みると、*druerie* 全体の共通点とさえ言えるだろう。

以上のことから、*druerie* とは眼に見えない愛という感情としてであれ、眼に見える贈り物という具体物としてであれ、女性から男性に与えられ、その後、感情の面でも肉体的関係の面でも愛し合う男女の相互的愛へと発展を遂げる⁽³⁷⁾ものである。しかし、*druerie* はまた、愛し合う男女以外の場合で問題となれば、それが暗示する肉体的関係のために、非難されるべきものとなってしまふものでもある。

結び

以上のことから、『レ』における amur、amitié、druerie の、それらが表す感情の主体と対象という関係から見た意味範囲は、次のようになる。

amur : 1)男女間の官能的愛（夫婦愛、愛というもの、愛の神を含む）、2)同性者間の親愛の情、あるいは死者に対する憐憫の情、3)神への愛（ただし宣誓の常套句における使用のみ）

amitié : 1)男女（夫婦）間の官能的愛、2)同性者間の親愛の情

druerie : 1)男女間の官能的愛、2)男女間の愛の証としての贈り物（具体物）

このように、これら3語の主体と対象との関係から見た場合の意味範囲には重なりが見られる。つまり、amur の意味範囲が最も広く、amitié の意味範囲はその中に含まれ、また druerie の意味範囲は具体物を表す点を除けば、やはり amur の意味範囲に含まれるのである。

それゆえ、これら3語の使い分けは主体と対象の関係という視点からだけでは説明されない。以上で考察したように、amitié とは「信頼の念」が付随する愛であり、druerie とは男女間の肉体的関係を伴う官能的愛である。そして、これら2語の意味範囲を amur が包含することを鑑みた上で、再度 amur へ眼を向ける時、「愛」という感情を簡素に表現するという一点において、amur の多様な使用例の共通項を見出すことになるだろう。

マリー・ド・フランスの『レ』において描かれている愛は、すでに amer に関する考察（川口(1999)）でも述べたように⁽³⁸⁾、恋人達の愛に留まらず、多岐にわたる人間関係における様々な有り様を呈している。それに加えて、本稿では、「愛」を意味し得る語を複数用いることによって、「愛」という感情の微妙な質的相違が表現されていることも確認された。したがって、愛によって結ばれた登場人物達が『レ』において織り成す人間模様を前にする時、その全体像を把握するためには、amer や amur の広い意味範囲全体を視野に収めつつ、細部においては amur、amitié、druerie の3語の使い分けによって表現される感情の綾を読み取っていくことが不可

欠となるのである。

註

- (1) 本稿では、*Les Lais de Marie de France*, publiés par Jean Rychner, coll.<C.F.M.A.>. n°93, Champion, 1983 (リシュネル版)をテキストとして使用する。各作品名に関しては次の略号を使用する。『ギジュマール』: *G*/『エキタン』: *Eq*/『とねりこ』: *F*/『ビスクラヴレ』: *B*/『ランヴァル』: *Lv*/『恋する二人』: *DA*/『ヨネック』: *Y*/『夜鳴鶯』: *Ls*/『ミロン』: *M*/『不幸せな者』: *Cht*/『すいかずら』: *Chv*/『エリデュック』: *El*。指摘箇所、引用箇所に関しては作品名の略号と行数のみを記す。なお、引用中の下線は全て引用者によるものであり、引用中の丸括弧は引用者による補足、角形括弧は引用者による訳註である。
- また、以下のテキスト及び現代フランス語訳も参照した。*Les Lais de Marie de France*, traduit en français moderne par Pierre Jonin, coll.<Traductions des C.F.M.A.>, n°13, Champion, 1982 (ジョナン訳 [リシュネル版の現代フランス語訳]) / *Marie de France, Lais* (1944), Edited by Alfred Ewert, Blackwell, reprinted 1987 (エヴァート版)。/ *Lais de Marie de France*, traduits, présentés et annotés par Laurence Harf-Lancner, texte édité par Karl Warnke, coll.<Lettres gothiques>, n°4523, Le Livre de Poche, Librairie Générale Française, 1990 (ヴァルンケ版+アルフ=ランクネル訳)。/ *Lais de Marie de France*, présentés, traduits et annotés par Alexandre Micha, coll.<GF-Flammarion>, n°759, Flammarion, 1994 (ミーシャ版+ミーシャ訳)。/ Yorio Otaka, *Lexique de Marie de France*, Maison d'Édition Kazama, 1994, pp.749-800 (大高版)。
- (2) なお、分類結果は本稿末に使用箇所一覧として掲載したので、随時参照されたい。
- (3) Cf. 拙論、「マリー・ド・フランスの『レ』における *amer* という語に関する一考察」、『年報・フランス研究』, 第 33 号, 関西学院大学フランス学会, 1999, pp.43-56。『レ』における「愛」についての参考文献に関しては、同論文、p.53、註(1)を参照のこと。
- (4) 本稿における *amur* に関する考察 (特に第 1 章) 及び使用箇所一覧は、拙論、「マリー・ド・フランスの『レ』における *amur* という語に関する一考察」、『TLLMF』, 第 6 号, 大阪市立大学大学院文学研究科森本研究室, 1995, pp.13-21 に修正を加えたものである。
- (5) Cf. Algirdas Julien Greimas, *Dictionnaire de l'ancien français. Le Moyen Age* (1979), Larousse, 1994, p. 27. なお、同項目中、熟語(5) *jour d'amour*, (6) *par amors*, (7) *pour amour que* の定義は省略した。
- (6) Jean Flori, « *Amour et société aristocratique au XII^e siècle. L'exemple des lais de Marie de France* », in *Moyen Age*, n° 98, 1992, pp.20-21.
- (7) Cf. Denise McClelland, *Le Vocabulaire des Lais de Marie de France*, Editions de l'Université d'Ottawa, 1977, p.173. 同書においては、どの使用例がどの分類に属するかという個別の情報は記されていない。それは *amur* の場合だけでなく、*amistité* や *druerie* についても同様である。
- (8) Cf. Yorio Otaka, *op.cit.*, pp.28-30. 大高(1994)は、マリー・ド・フランスの『レ』、『寓話』、『聖バトリックの煉獄』をコーパスとしているが、*amur* に関しては『レ』からの使用例だけが取り上げられている。また、大高(1994)の同ページで指摘されている *amur* の使用例数は 91 であるが、それは *Lv* v.377 と *Cht* v.214 が 2 項目にわたって指摘されているためであり、実際の使用例総数はリシュネル版と同じ 89 である。また、次の箇所の分類が大高(1994)と本稿では異なっている。
* *G* v.420, v.430 : 大高(1994)では「A.官能的愛」で指摘されているが、リシュネル版では *Amur* と表記されているため、本稿では「1-3.擬人化された愛(愛の神)」に分類した。なお、ジョナン訳は *G* v.420 を *l'Amour*, *G* v.430 を *l'amour* と訳出しており、したがって、前者を「擬人化された愛」、後者を「愛というもの」と解釈したと考えられる。
* *G* v.250, *El* v.1027 : 大高(1994)ではともに「A.官能的愛」で指摘されているが、*G* v.250 は奥方と侍女の相互的な愛を、*El* v.1027 はギルデリュエックのギリアドンに対する愛を表しているため、本稿では「2.官能的愛以外の愛」に分類した。
- (9) *Eq* v.221 : *tendresse* (ジョナン訳, ミーシャ訳), *amour* (アルフ=ランクネル訳) / *F* v.366 : *passion*

(ジョナン訳), aimer (アルフ=ランクネル訳, ミーシャ訳) / *El* v.684 (par amurs) : profondément (ジョナン訳), doucement (アルフ=ランクネル訳), d'un tendre amour (ミーシャ訳).

- (10) Cf. 拙論, 「マリー・ド・フランスの『レ』における amer という語に関する一考察」, 前掲論文, pp.45-46.
- (11) Cf. 加藤恭子, 「クレチアン・ド・トロワと同時代の作家たちにおける『愛』」 in 『上智大学仏語・仏文学論集』, 第25号, 上智大学仏文学科, 1991, 特に pp.21-22, pp.34-37.
- (12) Doris Desclais Berkvam, *Enfance et maternité dans la littérature française des XII^e et XIII^e siècles*, coll.<Essais>, n°8, Champion, 1981, p.23.
- (13) Cf. 拙論, 「マリー・ド・フランスの『レ』における amer という語に関する一考察」, 前掲論文, pp.46-47.
- (14) Cf. 同掲論文, pp.47-48.
- (15) ローマ神話の女神で、「魅力」を意味するウエヌスは「本来菜園の女神」であったが、これがギリシア神話の女神アプロディーテーと種々の連想から同一視されるに至った。また、アプロディーテーとは「愛、美、豊饒の女神」であり、この女神が吹き込む恋の心は恐ろしい激しいものであるという。Cf. 高津春繁, 『ギリシア・ローマ神話辞典』, 岩波書店, 1960, p.25「アプロディーテー」の項, p.60「ウエヌス」の項。
- (16) リシュネル版とミーシャ版では行頭の Amur(s)以外にも頭文字が大文字である例が確認されるが、大高版、エヴァート版、ヴァルンク版においては行頭では頭文字が大文字、その他の箇所では頭文字も小文字で表記されている。なお、「1-3. 擬人化された愛(愛の神)」に分類した7例のうち、ジョナン訳では *G* v.430 のみ amour、アルフ=ランクネル訳では *Eq* v.54, *El* v.304 のみ Amour (ともに行頭)、ミーシャ訳では全て Amour と表記されている。
- (17) *G* v.483 と *Eq* v.137 に関しては、「男女の愛についてのマリーの考えに関する主要な研究に大いに役立っている」という、G・S・バージェス(1987)の指摘がある。Glyn S. Burgess, *The Lais of Marie de France. Text and Context*, Manchester University Press, 1987, p.134.
- (18) ただし *El* v.66 の対象は、「隣人 veisins」と男性複数形で示されているとはいえ、女性を含むことも可能であるため、他の例に比べて性別が若干不明瞭であるように思われる。
- (19) Denise McClelland, *op.cit.*, p.62.
- (20) Cf. 拙論, 「マリー・ド・フランスの『レ』における amer という語に関する一考察」, 前掲論文, p.50.
- (21) Cf. 同掲論文, p.51.
- (22) Algirdas Julien Greimas, *op.cit.*, p.26.
- (23) Jean Flori, art. cité, pp.20-21.
- (24) Cf. Yorio Otaka, *op.cit.*, p.28. 大高(1994)の amitié の項目で指摘されている例は、『レ』における2例のみである。
- (25) Cf. Denise McClelland, *op.cit.*, p.173. マクレランド(1977)でも、amitié の2使用例のうち1例(どちらの例かは不明)は、「友愛 amitié, 家族的愛情 affection familiale, あるいは封臣と封主間の、さもなくば同輩衆 pairs 間の感情的忠誠 loyauté affectueuse という繋がりに一致する」語の一つとして、amer, amour とともに挙げられている。Ibid., p.62.
- (26) 因みに、*B* における amour の意味範囲は、男女間の官能的愛と同性者間の親愛の情である。
- (27) Algirdas Julien Greimas, *op.cit.*, p.185.
- (28) Jean Flori, art. cité, pp.20-21.
- (29) Roger Dubuis, « La notion de druerie dans les Lais de Marie de France », in *Moyen Age*, n°98, 1992, pp.397-398, pp.411-412.
- (30) Cf. Denise McClelland, *op.cit.*, p.177. マクレランド(1977)でも、druerie の使用例には「愛の証」を表す2例が含まれている(例えば *Chr* において奥方が恋人達に与える drueries とは「指輪、袖、旗」(*Chr* vv.68-69)である)という指摘がなされている。Cf. Ibid., p.50, p.116.
- (31) Cf. Yorio Otaka, *op.cit.*, p.159. 大高(1994)の druerie の項目で指摘されている例は全て、『レ』におけるものである。
- (32) Roger Dubuis, art. cité, p.403. なお、デュビュイ(1992)からの引用中のイタリックは全て、原文でもイタリックの箇所である。また、引用中の下線は全て引用者によるものである。
- (33) Cf. Ibid., pp.396-397.
- (34) Ibid., p.409.

- (35) *Ibid.*, p.405. なお、同ページにおいてデュビュイ(1992)は、エリデュックとギリアドンの間にはいかなる「肉体的関係 rapport charnel」もなかったと明言している。
- (36) *Ibid.*, p.406.
- (37) 『レ』における druerie は夫婦愛をその意味範囲に収めていなかった。しかし、デュビュイ(1992)は、マリー・ド・フランスにとって「druerie の論理的で望ましい帰結は結婚」であり、「druerie は肉体的行為において、そして事が可能である毎に結婚において、その開花を見出す愛でもある」と指摘している。Cf. *Ibid.*, p.407, p.412.
 このような考え方は、druerie を抱き合っていたエリデュックとギリアドンの結婚(*El* v.1145)や、作品中で druerie という語が使用されることはなかったが、息子の誕生によって二人の間の肉体的関係の存在は確かである *M* の恋人達の結婚(*M* v.528)によって確認されるものである。
- (38) Cf. 拙論、「マリー・ド・フランスの『レ』における amer という語に関する一考察」、前掲論文、特に pp.52-53.

引用文献(『レ』のテキスト及び現代フランス語訳〔註(1)を参照)を除く)

- BERKVAM, Doris Desclais (1981): *Enfance et maternité dans la littérature française des XII^e et XIII^e siècles*, coll. <Essais>, n°8, Champion.
- BURGESS, Glyn S. (1987): *The Lais of Marie de France. Text and Context*, Manchester University Press.
- DUBUIS, Roger (1992): « La notion de druerie dans les Lais de Marie de France », *Moyen Age*, n°98, pp.391-413.
- FLORI, Jean (1992): « Amour et société aristocratique au XII^e siècle. L'exemple des lais de Marie de France », *Moyen Age*, n°98, pp.17-34.
- GREIMAS, Algirdas Julien (1994): *Dictionnaire de l'ancien français. Le Moyen Age* (1979), Larousse.
- MCCLELLAND, Denise (1977): *Le Vocabulaire des Lais de Marie de France*, Editions de l'Université d'Ottawa.
- OTAKA, Yorio (1994): *Lexique de Marie de France*, Maison d'Édition Kazama.
- 加藤恭子 (1991): 「クレチアン・ド・トロワと同時代の作家たちにおける『愛』」、『上智大学仏語・仏文学論集』, 第25号, 上智大学仏文学科, pp.19-37.
- 川口陽子 (1999): 「マリー・ド・フランスの『レ』における amer という語に関する一考察」、『年報・フランス研究』, 第33号, 関西学院大学フランス学会, pp.43-56.
- 高津春繁 (1960): 『ギリシア・ローマ神話辞典』, 岩波書店。

使用箇所一覧

- * 無括弧の数字は使用例数を、角形括弧は使用例数の対総使用例数比を表す。
 * 使用箇所は丸括弧内に作品名の略号、行数の順で記す。

AMUR : 89

1. 男女の場合(官能的愛) : 79 [約 89%]

1-1. 行為の主体、対象ともに特定の個人である場合 : 54

1-1-1. 恋人達 : 48 [約 54%]

1) 主体=男性, 対象=女性 : 17 (G: 455, 459 / Eq: 221, / F: 366 / Lv: 410 / Y: 320, 408, 522 / M: 48 / Cht: 214 / Et: 343, 349, 361, 420, 684, 697, 712).

2) 主体=女性, 対象=男性 : 16 (G: 469, 529 / Eq: 179 / F: 255, 275 / B: 115⁶⁰ / Lv: 133 / DA: 65 / M: 31 / Cht: 43 / Et: 398, 447, 473, 513, 520, 944).

3) 相互的 : 15 (G: 451 / Eq: 136, 213 / Lv: 148, 377, 441 / DA: 4 / Y: 140, 205, 558 / M: 531 / Chv: 8 / Et: 502, 580, 1150).

1-1-2. 夫婦 : 1 1) 主体=妻、対象=夫 : 1 (B: 55).

1-1-3. 行為の主体、対象のどちらか一方が、愛し合う男女の敵対者である場合 : 5

1) 主体=男性の敵対者 : 1 (G: 711) 2) 対象=男性の敵対者 : 2 (G: 834 / B: 108⁶⁰).

3) 主体=女性の敵対者 : 1 (Lv: 265). 4) 対象=女性の敵対者 : 1 (Lv: 273).

1-2. 行為の主体、対象のうち少なくともどちらか一方が不特定者である場合 : 17

1-2-1. 行為の主体、対象のどちらか一方が、性別指定のある不特定者である場合 : 7

- 1) 主体=女性(達)、対象=ギジュマール: 2 (G: 115, 648)
 - 2) 主体=ギジュマール、対象=女性(達): 5 (G: 58, 66, 131, 448, 551)
 - 1-2-2. 行為の主体、対象ともに、性別指定のある不特定者である場合: 1
 - 1) 主体=男性、対象=女性: 1 (Eq: 140)
 - 1-2-3. 行為の主体、対象ともに性別不明の不特定者である場合: 3 (G: 237, 240, /Ls: 63)
 - 1-2-4. 愛というもの: 7 (G: 234, 483, 491 / Eq: 18, 137, 163 / M: 145)
 - 1-3. 擬人化された愛(愛の神): 7 (G: 379, 420, 430, 499 / Eq: 54 / Lv: 118 / El: 304)
 2. 官能的愛以外の愛(対象が人間である場合): 8 [約9%]
 - 2-1. 行為の主体、対象ともに特定の個人である場合: 4
 - 2-1-1. 行為の主体、対象が異性である場合: 1
 - 1) 主体=奥方、対象=死亡した3騎士: 1 (Ch: 167^b)
 - 2-1-2. 行為の主体、対象が同性である場合: 3
 - 1) 主体=エキタン、対象=家令(男性): 1 (Eq: 73)
 - 2) 主体=ギルデリュエック、対象=ギリアドン(女性): 1 (El: 1027)
 - 3) 相互的(女性:奥方と侍女): 1 (G: 250)
 - 2-2. 行為の主体、対象のどちらか一方が、不特定者である場合: 4
 - 1) 主体=領主、対象=家臣達: 1 (El: 63)
 - 2) 主体=家臣達、対象=王: 1 (B: 171)
 - 3) 主体=エリデック、対象=隣人達: 1 (El: 66)
 - 4) 主体=騎士達、対象=ランヴァル: 1 (Lv: 24)
3. 神への愛: 2 [約2%] (Lv: 520 / M: 434)
 - (a) B v.108とB v.115はともに、主体(ビスクラヴレの妻)と対象(彼女の再婚相手となる騎士)が同一人物である。しかし、彼等二人の関係は、B v.108では夫を愛する妻と彼女に戀想する騎士(敵対者)であったのが、B v.115では恋人同士であるというように、変化している。したがって、本分類ではそれぞれの箇所での関係に注目し、これら2使用例を異なる項目に分類した。
 - (b) Ch: v.167の対象である3騎士は主体である奥方の恋人であったが、この箇所ですでに故人であり、恋人達が共に生きている他の場合とは状況が異なっている。さらに *amer* の使用例 (cf. 拙論、マリー・ド・フランスの『レ』における *amer* という語に関する一考察」、前掲論文、p.45) から、奥方の愛する対象は4騎士全体であり、3騎士の死亡後、生き残った1人だけを愛すること、つまり、4人の中の誰か一人だけを愛することは彼女には不可能であることが理解された。したがって、Ch: v.167の *amur* には官能的な意味が含まれていない、要するに3騎士の生前と死後で奥方の彼等に対する感情に変化が見られたと考え、この箇所は本項目に分類した。

AMISTIE : 2

1. 男女の場合: 1 1) 主体=夫、対象=妻: 1 (B: 83)
2. 同性の場合: 1 1) 主体=ミロン、対象=姫からの使者: 1 (M: 35)

DRUERIE : 16

1. 男女の間の愛を表す場合: 13
 - 1-1. 恋人達: 9 [約69%]
 - 1) 主体=男性、対象=女性: 1 (Eq: 124)
 - 2) 主体=女性、対象=男性: 3 (G: 505 / DA: 66, 69)
 - 3) 相互的: 5 (Eq: 132, 185 / Lv: 336 / El: 542, 579)
- 1-2. 行為の主体が愛し合う男女の敵対者である場合: 2
 - 1) 主体=女性の敵対者: 2 (Lv: 267, 317)
- 1-3. 行為の対象が不特定者である場合: 2
 - 1) 主体=エキタン、対象=女性(達): 1 (Eq: 15)
 - 2) 主体=奥方、対象=男性(達): 1 (Eq: 82)
2. 愛の証としての贈り物を表す場合: 3
 - 1) 主体=女性、対象=男性: 3 (Ch: 57, 68 / El: 431)

(文学部非常勤講師)